

第2回対人援助学会 ワークショップ 企画3

◆ テーマ:「対人援助のコミュニケーションについて考える—対等性、固有性、アドボカシー—」◆

登壇者:飯田奈美子 三野宏治 西田美紀

◇飯田奈美子:<http://www.arsvi.com/w/in04.htm>

京都市中国帰国者支援相談員(中国語通訳者)、社会福祉、土京都市国際交流協会行政通訳相談事業 コーディネーター等。研究・実践テーマは「コミュニティ通訳研究」、「在住外国人支援研究、主に中国帰国者の介護や医療に関わる研究」、また、「外国人支援団体のネットワーク化」。立命館大学先端総合学術研究科博士課程在籍。

◇三野宏治:<http://www.arsvi.com/w/mk20.htm>

精神保健福祉士。社会福祉法人心正会役員等。研究・実践テーマは「精神障害当事者と支援者による障害者施設における対等性についての研究」、「脱精神病院化に関する言説分析及び実態調査研究」。立命館大学先端総合学術研究科博士課程在籍。

◇西田美紀:<http://www.arsvi.com/w/nm12.htm>

看護師・臨床心理士。研究テーマは「医療におけるナラティブ(語りと語れないもの)」、「難病患者のQoL/在宅療養支援」。現在、立命館大学先端総合学術研究科博士課程在籍。

◆司会(コーディネーター):中村正先生

◆ワークショップ 趣旨/意義/目的等

対人援助においては、コミュニケーションの重要性は自明のように認識されている。また、専門職者から見たコミュニケーション技法については、傾聴や共感をもって自己決定を促すものとされている。

ただ、本来のコミュニケーションは双方向性のものであり、専門家の技法や職業倫理だけでは、語りきれない問題が存在している。

対人援助場面のコミュニケーションを改めて振り返ってみると、専門家からの一方的な情報提供や型にハマらぬコミュニケーションの無視、当事者の望まないコミュニケーションの押し売りや、また反対に、対等であろうとするがゆえ専門職者の仕事を果たせぬという問題が想起される。

しかしこれらの問題は、さまざまな対人支援場面で専門家によって認識されているにもかかわらず、事例や経験の蓄積や具体的な解決方法、体系的な議論や考察がなされているとは言い難く、「対人援助場面でのコミュニケーション」まだまだ議論の余地がある。

そこで、本ワークショップでは、この対人援助場面における専門職者と当事者のコミュニケーションの「ずれ」について焦点を当て、その上で登壇者の持つ問題意識と臨床経験から、専門家と当事者という権力や立場の非対称な存在の間で生まれてくる「ずれ」について議論し、「対人援助のコミュニケーション」場面での問題点を明らかにし、どのような解決策が可能であるかを探ることを目的とする。

以上